

第11分科会

子どもの主体性がいきる

保育者のかかわり

助言者	川端 恵子 (前下西小学校校長)
司会者	鎌田 美保 (中央認定こども園)
問題提起者	徳浦 亜美 (榕城幼稚園)
記録者	東 秀美 (すみれ子ども園)
記録者	濱崎 羽純 (すみれ子ども園)
ホスト	野田 理教 (西之表幼稚園)
ホスト	武 祥三 (野間幼稚園)
運営委員	野田 理教 (西之表幼稚園)

【研究課題】

保育実践

【研究・研修の視点】

幼稚園教育要領の「幼稚園の役割」には「幼稚園は、家庭での教育を基盤にしなが家庭では経験できない社会・文化・自然などに触れ、教師に支えられながら、幼児期なりの世界の豊かさに出会う場である。〈中略〉幼稚園では自発的な活動としての遊びを十分に確保することが何よりも大切である。それは遊びにおいて幼児の主体性が発揮され、生きる力の基礎ともいべき生きる喜びを味わうことが大切だからである。」と示されている。幼稚園においては、子どもたちを取り巻く環境を整え、子どもたちの育ちを援助し主体的な活動を保障していかなければならないと考える。そのためにも、幼児の主体性がいきる保育者のかかわりを保育実践を通して、保育の記録、分析を行い、保育者の指導における関与の傾向を分類し幼児の発達がどうかされていくのかを研究していく。

また、幼児の主体性と保育者の幼児理解と援助がバランスよく絡むことで、幼児は発達に必要な体験をしていく。幼児の主体性に任せて「幼児をただ遊ばせている」だけでは、子どもの主体性は、育たない。常に保育者は一人一人の幼児の中に今何を育てたいのか、一人一人の幼児がどのような体験を必要としているのか明確にし、幼児理解と援助を行っていく必要があると考える。

【研究の手がかり】

- ・ 日々の保育を振り返り、現状を知る事が重要であると考え、二つの事例を挙げて、子どもたちがどの様に行動発言し、それに対して保育者がどの様な声かけ・対応・かかわり方をしているかを分析していく。
- ・ 自園の保育や行事を、子どもたちの主体性がいきる活動にしていく為には、どのようにしていけばよいか検討する。

【研究計画】

◎令和4年度

- ・ 子どもたちが主体的に活動する保育と保育者のかかわりについての事例研究をする。
- ・ 保育の記録と子どもの反応、保育者のかかわり方を分析する。

◎令和5年度

- ・ 令和4年度の分析をもとに、子どもの主体性がいきる保育を実践し園内研修等を通して検証していく。

【発表の概要】

1 研究・研修テーマのとらえ方

子どもたちは日々遊び学びながら成長しているが、その保育がただ遊ぶだけでは、家庭にいるのとかかわりない。幼稚園教育で、子どもの主体性を育むことは、「自ら学び、自ら考える力」が生まれ、そのことから生きる力の基礎が培われる。その為保育者は、子どもの成長、段階を考えながら個々の幼児理解を深め、子どもたちが主体的な学び、活動ができるように、日々努力しなければならない。幼小接続の観点からも「幼児期のおわりまでに育ててほしい10の姿」を成長課題の目標にしながも、主体性のある子どもを育てるには、どのように保育者がかかわるべきなのか、どのような援助が有効的であるか、研究していきたい。

2 研究の内容

- (1) 保育実践を通して、保育者のかかわりに対して抽出児の反応を追求する。また、保育者のかかわり方のタイプがどのようなものがあるか分析し、子どもたちにとってより良いかかわりはどういったものかを研究する。
- (2) 子どもたちの主体性がいきるためには保育者のどのようなかかわりが大切になってくるのかを考察する。

3 研究の方法

- (1) 保育実践を通して、子どもの主体的活動ができていたのか、また、子どもの一つ一つの言動に対し、保育者がどのようなタイプの援助をしていたのかを確認するために園内研修を行う。
- (2) 今後、子どもたちの主体性がいきるために、どのような事をしていけばよいのかを園内研修し、職員間の共通理解を深める。

4 実践例

- (1) 保育実践（子どもの活動において、保育者がどのような支援のタイプでかかわっていたのか振り返り、保育者同士の共通理解を図る。）
- (2) 園内研修（子どもの主体性がいきる保育者の援助、かかわり方、または、保育のあり方を追求する。）

5 まとめ

「子どもの主体性がいきる保育者のかかわり」のテーマを学ぶにあたり、子どもの主体性とはどのような姿であるか考えてみた。子どもたちが、伸び伸びと発言したり、活動したりすること、また、活動を通して、「やってみたい」「知りたい」という興味、関心が生まれ、試行錯誤しながら、取り組む姿であると考え。保育者のかかわり方で、子どもたちの内的行動は様々な変化、成長をもたらす。保育者が、子ども一人一人のバックグラウンドを理解し、子どもが心の安定を前提として、自立へと向かい、生きる力を身につけていけるように保育者も主体性をもってかかわっていくことまた、この幼児期の沢山の経験を小学校へ接続していくことが重要であると考え。

6 今後の課題

- ・ 今までの保育において、子どもたちが失敗しないようにと先回りして誘導することが多かったと気付くことができた。今後は子どもの主体性を引きだせる援助をより深く考えていかなければならないと考える。子どもの主体性がいきるためには、保育者も、もっと主体性を持ち、保育者間で意見を交流したり、新しいアイデアを出したりして、保育に取り組むことが課題である。

【討議の柱】

- ・ 保育・活動を通して、子どもの主体性がいきるために保育者はどのようなかかわり、援助を行っているか、大切にしているか。
- ・ 保育者が考える「子どもの主体性がいきる保育」とは、どのようなものがあるか。

【討議内容】

1 問題提起に関する質疑応答

質問① 保育の上で大切にしていることや子どもが主体として保育を進めるにあたって重要なことは何か。

回答 ・ 挨拶ができること、「はい」という返事ができること、靴を揃えること、席を立つとき椅子を中に入れることなど基本的に4点を意識している。毎日毎日しっかり行えるように保育者も心掛けながら子どもたちに声を掛けている。
幼稚園からこの4点を継続していくことで、小学校に上がってからもスムーズに行うことができている。

- ・ これからの人生を前向きに楽しく過ごしてもらいたいという思いから、子どもたちの「やってみたい」「できた」の気持ちを引き出せるようにしている。また、一人ひとりの子どもたちが主人公になれるような保育も心掛け、保育者間で連携を取り、意識している。

質問② タイプという言葉が数回使われているが、それぞれのタイプの具体的内容はどのようなものであったか。

回答 ・ ①関与なし②見守る③受容④協同⑤示唆⑥誘導⑦主導の7つのタイプがある。

質問③ 役割決めて揉めないようにするためにどのように決めたのか。

回答 ・係りの役割について、保育者が説明したり、分かりやすく表にまとめたりして、子どもたちの意思を尊重して、決めることができるようにしている。また、やりたい係りが重なってしまった時には、できる限り、今までしたことのない係りを経験できるように声掛けや話し合いの場を作っている。子どもたちが納得いくように話し合いをして、無理にやりたくない係りを押し付けないように係り決めを行っている。

2 グループ討議

(1) 保育・活動を通して、子どもの主体性がいきるために保育者はどのようなかわり、援助を行っているか、大切にしているか。

- ・ 興味を持っていることやクラスに実態を把握したり、サークルタイムなどを活用し、子どもたちと一緒に考える時間を作ったりすること。
- ・ 指示待ちよりも達成感や意欲を培えるような援助を行っている。
- ・ 子どもに選択肢をたくさん持たせる。何をしたいのか自分で選ばせることが大事である。
- ・ 自由遊びの時間を使って、遊びの場を整えていく。季節や子どもの様子に応じて、保育室にあるものを増やしていく。ただ、増やしていくだけでなく、季節の歌や絵本を見ることで、保育者の誘導を意図的に持っていくことができる。
- ・ 虫取りの場合は、道具を整えて、子どもの経験の幅を広げて、調べるものを出すことで、子どもたちが主体的に取り組むことができる。最終的に、製作したものや遊んだもの、思ったことをみんなの前で発表する、自分の意見を伝えられる場を整えてあげることが大切である。
- ・ 一人ひとりにあった関わり方をする。その上で、子どもの意見を聞き、それにあった保育を行いながら、意見を活動の中に取り入れていく。
- ・ 活動を行うときは、子どもに考えさせながら行い、子どもの意見も取り入れていく。

(2) 保育者が考える「子どもの主体性がいきる保育」とは、どのようなものがあるか。

- ・ 日頃の会話や興味があるものを保育者が拾って、それをくみ取り、やらせてあげたり、認めてあげたりする。
- ・ 子どもの意見を取り入れて、声を拾って、活動をどんどん展開させていくことや主活動だけでなく自由保育、ごっこ遊びなどを通して、その中からも子どもの主体性を引き出ししていくこと。
- ・ やりたくないという気持ちがある子どもには、強要はせずに、上手に保育者が輪の中に誘い、保育活動の中に導いていくことが大切である。

【助言者のまとめ】

主体性とは・自分の意思・判断で行動しようとする態度。

⇒目的を達成するために何をすべきか考えながら、自分の意思で行動を決定できる態度である。

子どもの主体性を尊重する保育とは・

子どもがしていることを見守ること？子どもができるようになるまで待つこと？

⇒「見守る」、「待つ」は時として「何もしない」ことになる。

「子どもがしたいようにさせることではない。」

保育者が意図を持って、計画的な環境を構成する。望ましい方向に向かって促す。そのためには、

- ①子どもの主体性と保育者のバランス
- ②子ども一人一人の興味・関心や発達の段階など細かな実態把握
- ③やる気の喚起
- ④意欲を持続させるための称賛・承認

問いかけ・見守り・承認・称賛・協力などの関わりを重視し、誘導・指示は控えることで保育者は、自分の力で考える・自分から行動する子どもたちの主体性を引き出すことができる。保育者が人と人を繋いでいくことで、子どもがハードルを乗り越えられるような環境を作ることができる。

【まとめ① 保育者の関わり方】

答えを教えずに「どうしたらいいかな？」などの問いかけを行うことで、課題を自分のこととして受け止める・より深く考えるようになる・周りの承認・称賛が自信になる・失敗も経験させてみる。活動の場面において、保育者は、「よき理解者」「共同作業者」「あこがれのモデル」となる。

【まとめ② 育ち合いが起こる環境づくり】

子どもたちが毎日通う子ども園には、子どもたちが安心して通えることが大切である。「私の

幼稚園」「僕のクラス」など一人一人に存在の場があることが大切である。安心して過ごせる場つまり、心の安全基地になっていること。「自分はすごく受け入れられているんだ」=自己肯定感、「自分って素敵」と思える環境が園内、クラス内にできているかが大切である。周りの子どもたちの良さにも気づいてあげられているか、保育者同士で語り合い、子ども一人一人を肯定的に理解し、育ち合う場を作って、研修の場を大切にしていくことが大切になってくる。ただ、注意しなくてはいけないことが、子どもたちが失敗したときや友達同士でのトラブルが起きたとき「また、あなたなの」などのマイナスのレッテルを貼るような言葉かけをしてしまうと、子どもたちも同じように「ダメな子」「できない子」などの見方をするようになってしまう。そのため、「自分はできない子」と自己肯定感を下げてしまい、何においてもやる気を無くしてしまうことがあるため、マイナスな言葉は要注意である。

【まとめ③ 研修の場の充実】

今回の榕城幼稚園の実践は、子どもを語り保育者の関わりの丁寧な記録と分析が行われていた。記録を細かく分析することによって、良い取組や課題のある取組が明確になっていた。発表の中で、自分たちの関わりを振り返ることによって、誘導する関わりが多かったことに気づくことができたことあった。分析表が子どもを知る上で有効であったといえる。日々子どものためにと思い行っていることが、実は関与しすぎていた、もっと子どもたち自身が考えられる時間が必要だったなど、環境構成を練り直す必要があったと分かることができた。このように、自分自身の保育を振り返ることは重要である。PDCAのサイクル（P…Plan／計画・D…Do／実行・C…Check・A…Action／改善）を用いて、学期ごと又は半年ごとに自分たちの取組を自己評価し、課題を明らかにして改善につなげることは重要である。さらに今回、榕城幼稚園の丁寧な記録が保育の改善点を見出す大きな材料となった。細かく記録していくことは、大変な作業となるが、1年に1事例でも細かく記録を残しておくことはとても有意義なことである。取組を振り返ることによって、子どもの細かな成長を把握することもできる。記録は宝となる。また記録の保存方法の工夫として、ドキュメンテーションの手法もあげられる。子どもたちの表情も記録でき、保育者にとっても保護者にとっても好評であったという例もある。子どもたちの言語活動を大切にサークルタイムも各発達の段階に応じて取り入れていきたい1つである。子どもたちが自分の考えを友達に伝えようとする、その言葉を聞くということはとても大切である。話す・聞くという活動は、就学後子どもたちの生活の中で必ずいかされていく。新しいことへの挑戦は大変なことであるが、このような取組をコツコツ積み重ねることによって、教師間の協力体制は強くなり、園内研修の充実、「チーム」としての意識が醸成されていく。そうしていくことで、保育の質の向上へつながっていくことになる。

【今後の課題＝小学校との接続について】

一つ目の課題として、小学校では、令和2年度から新学習指導要領が実施され、新たな取組が次々と行われている。例として、小学校3・4年生では週1時間の外国語活動、5・6年生では週2時間の外国語の学習（主に英語）が行われている。5・6年生では、「読む」「聞く」「話す」に加えて「書く」まで学習の中で行う。そして、1年生からプログラミング学習が導入されている。まず、プログラミングの思考に慣れ、高学年ではプログラムに従って図形を描いたり簡単なプログラムを作ったりする。また、1人1台ずつタブレットを持ち、「調べる」「記録する」「発表する」など学習の中で活用している。自宅にもタブレットを持ち帰りドリルに取り組んだり、場合によっては自宅から授業を受けたりする取組を行っている自治体もある。このように時代の流れに応じて新しいことへの取組は疾風怒濤のように導入されている。もう一つの課題は、「幼児期の終わりまでに育てたい姿」を小学校学習指導要領と同じように到達目標であると誤解している小学校教諭が多いのではないかとということである。就学前はどのような育ちをしてきているのか、幼児期の教育・保育内容について理解することが必要ではないかと考えている。このような取組が小学校で行われている事を理解すると、就学前に少しでも小学校で行う学習内容にふれさせた方が良いのではないかと焦りの気持ち抱くこともあるかもしれないがその必要はない。幼児期は就学後の教育の土台作りを行う大事な過程である。そのため幼児期で小学校を教育の先取りをする必要はない。重要なことは、早寝・早起き・朝ごはんといった「基本的生活習慣」、友達と一緒に楽しく「遊びこむ」、なぜかな? どうしてかな? という「好奇心」、分からないことを調べてみようという「意欲」である。そして、たくさんの本に親しませ、「本が大好き」と言える子どもたちを育ててほしい。以上のことを大切に、子どもの主体性を尊重した保育に取り組んでほしい。